

たいたいに なにがあるやらごのよふな

ものでもしりたものはあるまい

このはなし 月日のしごとこれをみよ

心しだいになにをするやら

けふの日は なにもしらずにたれにても

せかいなみなることであれども

あすにちは ごふゆふみちをみるやらな

しんの心があらわれてくる

この心 あらわれてたることならば

たれもそむきはさらにでけまい

これみたら ごんなものでもしんじつに

あたまかたげてみなしやんする

さあしやん この心さいしいかりご

さだめついたることであるなら

このはなし 月日の心ばかりやで

にんげん心あるごおもふな

このことを みな一れつはしんじつに

おもてたのめばごんなことでも

御筆先十二號 (おはり)

御筆先 十三號

明治十一年四月廿八日(御教祖八十一歳の御時)より御書取

けふまでは なにかしんばいしたなれど

あすにちからは おふくわんのみち

いまゝでは ござんななんぢうなみちすじも

みへてあるから ござわりばかり

このさきは たしかうけよふ月日には

ござんな ござでもあぶなきはない

だんぐご ござんなは なしをきいたごて

せかいたの しめ月日は たらき

これからは 月日でかけるは たらきに

なにをする ござもたれもしろまい

にちくに せかいの ござろみすませば

一れつ ござもいぢらしい ござ

月日には だんぐご ござんな ござでもな

たすけるも よふせくばかりやで

これまでは ござわりばかり ゆておいた

もふ これからは ござはりはない

同年五月五日御書取

けふまでは なにもしらずに にんげんの

心ばかりで しんばいをした

これからは ござろしい かりいれかへて

神にもたれて よふきづごめを

したるなら そのまゝ ござろしい かりご

りやく あらわす これをみてくれ

これさいが たしかりやくがみへたなら

あごはいつでもみなかんろふだい

このさきは 月日一ごふゆふたご

ごんなことでもそむきでけまい

月日より ゆうたることをけすならば

すぐにしりぞくしよちしていよ

いま、では うちもせかいもしんじつの

心にわかりさらにないので

月日には だい一これがざんねんな

なんごこれをばすましたるなら

この心 ざふしたならばわかるやら

なんでもいけんせねばならんで

いけんでも 一寸の人ではないからに

おふくのむねがこれはむつかし

いかほごに むつかしことをゆふたごて

めへくのごごもいけんするぞや

このもよふ ざふしたならばよかるふぞ

なんでもかみのざんねんあらわす

にちくくに 神のむねにはだんくご

ほこりいつばいつもりあれごも

このほこり そふちするのはむつかしい

つごめなりごもかゝりたるなら

殿 こゝろさへ しんじつ神がうけされば

ごんなほこりもそふちするなり

訓 いちれつの むねのうちさいすきやかに

そふちしたてたことであるなら

訓 それからは せかいちうはきがいきむ

よふきづくめにひごりなるぞや

訓 しかごさきけ 高山にてもたにぞこも

みれば月日のこごもばかりや

訓 にんげんも 一れつこごもかわいかる

神のざんねんこれおもてくれ

これまでは どのよなこごをみたごても

神のほふにはちいごみていた

このたびは もふひがつんであるからな

ごんなこごでもみなゆふほごに

月日には せかいちうをみわたせご

もごはじまりをしりたものなし

このもごを ごふぞせかいへおしへたさ

そこで月日があらわれてでた

このたびの 月日ざんねんごゆふものは

よいなるこごでないごおもへよ

月日には このしんじつをせかいちうへ

ごふしてなりごおしへたいから

それしらず 月日ゆふこごみなけして

あごはにんげんごころはびかる

このさきは 月日のざんねんりいぶくを

みなはらすでなこれがしよちか

月日にも ざねんりいぶくはらしたら

あごはめづらしみちをつけるで

このみちは ごふゆふこごにおもふかな

よろづたがいにたすけばかりを

訓 せかいちう たがいにたすけするならば

月日もこゝろみなひきうける

月日にも こゝろひきうけするからは

ごんなこごでもはたらきをする

訓 はたらきも ごふゆふここにおもふかな  
ぜんごあくごをわけるばかりや

同年五月十六日御書取

訓 けふまでは ごんなあくじをゆふたごて

わがみにしりたものはあるまい

この心 神がしんじつゆてきかす

みな一れつはしやんしてくれ

訓 博愛 せかいちう いちれつはみなきよだいや

たにんごゆふはさらにないぞや

訓 博愛 このもごを しりたるものはないのでな

それが月日のさんねんばかりや

訓 四海兄弟 高山に くらしているもたにぞこに

くらしているもおなじたましい

訓 四海兄弟 それよりも だん／＼つかうごうぐわな

みな月日よりかしまものなるぞ

訓 四海兄弟 それしらず みなにんげんのこゝろでは

なんさたかひくあるごおもふて

訓 四海兄弟 月日には このしんじつをせかいちうへ

ごふぞしいかりしよちさしたい

訓 四海兄弟 これさいが たしかにしよちしたならば

むほんのねへはきれてしまうに

月日より しんじつおもふ高山の

たゝかいさいがおさめたるなら

このもよふ ごふしたならばおさまろふ

よふきづごめにでたるここなら

この心 たれがゆふさはおもふなよ

月日のこゝろばかりなるぞや

このつごめ たかやまにてはむつかしい  
神がしいかりひきうけをする

このたびは ござんなことでもしんじつに  
たしかうけやいはたらきをする

神がで、 せかいちうをはたらけば  
ござんなつごめもこわみないぞや

しかさきけ 高山やさてたにぞこそ  
まゝにしられたことであれども

これからは 月日かわりにでるほごに  
まゝにしよならすればしてみよ

いまゝでこ なにかもんくがちがうでな  
これからさきは神のまゝやで

天啓主旨 月日より あまくだりたる心はな  
なんのこごやられたれもしろまい

天啓主旨 だ一一は りうけつくるをたすけたさ

こゑ一ちよふおしへたいから

天啓主旨

こゑでもな ござふしてきくごおもふなよ

こゝろを神がうけとりたなら

いまゝでは しんじつかみがゆてあれご  
うちからしてもうたがうばかり

このたびは なにをゆふてもうたがふな  
これうたがへば月日しりぞく

このこごは あくごいほごもゆふておく  
これうたがへばまこごこふくわい

月日より 一ごふゆふておいたこご  
いつになりてもちがうこごなし

いまゝでは 月日なにごごゆふたごて  
みなうたごふてゆいけすばかり

月日には だい一これがざんねんな

なんでもこれをしかさきめるで

これからは 月日ゆふここなにごとも

そむかんよふに神にもたれよ

したるなら 神のほふにもしんじつに

たしかひきうけはたらきをする

月日には ころほごくごきつめるから

ころちがへばすぐにしりぞく

訓 しんじつに ころにまここあるならば

ごんたすけもちかうここなし

同年九月十九日より御書取

このさきは りうけのこゑをちがわんよ

ごふぞしいかりしよちしてくれ

けふからは 月日のおもふここをばな

ごのよなここもみなゆいかける

いまゝでも たいてはなしもごいたれご

月日おもわくまだゆふてない

これからは ごんなはなしをしたるごも

これをかならずうそごおもふな

ごのよふな ことをゆふやらしれんでな

月日のころせゑているから

訓 この心 ごふゆふここにおもふかな

にほんもからもてんじくまでも

訓 このあいだ みちのりよほごあるけれご

いちやのまにもはたらきをする

このはなし にんげんなんごおもてゐる

月日かじものみなわがごごも

いつまでも 月日じいくりにしてゐれば

いつになりてもおさまるめなし

それゆへに 月日でかけるはたらきに

ごこへでるやらしりたものなし

せかいちう 心すますごゆふからは

一寸のごこやごさらにおもふな

訓 どのよふな ことでもめへくむねのうち

すましたならばあふなきはない

だんぐご 月日にちくおもわくは

おふくの人をまつばかりやで

訓 この人を ざふゆふことでもまつならば

一れつわが子たすけたいから

ごこしには ざんなめづらしみちすじが

みゑてくるやらこれしれんでな

くちさきで なんぼしんじつゆふたごて

たれかき、わけするものはない

それゆへに 月日このたびごのよふな

ごこもしんじつみなしてみせる

どのよふな ことをしたるもにんげんの

心まぢるごさらにおもふな

月日には あまりしんじつみかねるで

そこでごのよなごこもするのや

いかほどの ごふてきたるもわかきでも

これたよりごさらにをもふな

このたびは 神がおもいへあらわれて

じゆよじざいにはなしするから

どのよふな こともしんじつするからは

むねのうちよりひごりすみきる



いま、では 一れつはみなにんげんの  
心ばかりでしやんしたれご

このたびは どのよなこともにんげんの

なにもかも どのよなこともゆふておく  
こゝろしやんはさらにいらんで  
なにをゆふてもうそごおもふな

高山で どのよなものがはびかるも

このしんじつをたれもしろまい

訓 月日には ざんなごころにゐるものも

むねのうちをばしかごみてゐる

訓 月日には ざんなごころにゐるものも

むねのうちをばしかごみてゐる

訓 月日には ざんなごころにゐるものも

むねのうちをばしかごみてゐる

月日より になく心せきこめご

そばの心にわかりないので

せきこみも なにのこごやごおもふかな

このはなし みな一れつの心には  
りゆけつくれば水がほしかろ

月日には だい一これをたすけたさ

なにごとも 月日いかほごくごいても  
なにごともおもふてしやんしてゐる

なにもかも 月日いかほごくごいても

それゆへに 月日ざんねんりいぶくが  
まごごにきいてくれるものなし

いま、では 月日きたらんそれゆへに

じいごしてゐたこごであれごも

このたびは もふひがつんであるからな

ざんなしごごもはやくかゝるで

このたびは もふひがつんであるからな

ざんなしごごもはやくかゝるで

訓 このさきは どのよなみちがあるごても  
人をうらみなわがみうらみや

訓 このはなし どのこのことゝもゆわんでな  
高山にてもたにそこまでも

どのよふな ことをゆふのもたすけたさ  
そこでいろくゞごきつめたで

このさきは なにをゆふてもどのよふな  
ここでもあしきことにゆわんで

しんじつの たすけばかりをせくからに  
そこでだんくゝいけんしたのや

しんじつに こゝろすましたそのゆへは  
たすけるもよふはやくおしへる

瘦瘠守 このたすけ どのよふことであるならば  
ほふせんよのまむりつごめを

不老不死守 まだたすけ やまずしなずによわらんの  
しよこまむりをはやくやりたい

なにもかも よろづたすけをせくからに  
心しだいにごんなことでも

訓 一れつは みなめへくゝのむねしだい  
ごんなことをがかなわんでなし

雨乞 あまごいも いまゝで神がしんじつに  
なにもゆふたることはなければご

このたびは どのよなこともしんじつを  
たづねくるならみなゆてきかす

月日には なにかなわんごゆわんでな  
みなめへめへの心しだいや

御筆先十三號 (おはり)

御筆先 十四號

明治十二年六月(御教祖八十二歳の御時)より御書取

夢 どのよふな ゆめをみるのも月日なり

なにをゆふのもみな月日やで

月日より にちく心せきこめご

そばの心はいづむばかりで

いづむのも ごふしていづむことならば

上にはなにもしらんゆへなり

せかいには それをしらずになにごとも

みなしたごふていづみいるなり

月日には だいいこれがざんねんな

そこでどのよなごともするのや

月日より にちく心せゑたごて

くちではごふもゆうにゆわれん

それゆへに ゆめでなりごもにをいかけ

はやくしやんをしてくれるよふ

月日には このざんねんごゆふものは

くちでゆふよなごこでないぞや

けふまでは そんなはなしもだんご

いろくごいてきたるなれごも

なにゆふも ひがらくくげんきたらんで

なにもみえたるごこはないので

それゆへに なにを月日がゆふたごて

みなうたごふてゆいけすばかり

日月には だいいこれがざんねんな

なんでもこれをしかごあらわす

いまゝでは ござんなことをばゆふたごて

すぐにみえたることはなけれど

このたびは 三日のうちにだんくご

せかいのはなしなにをきくやら

これからは にち／＼月日はたらくで

ござんなしごをするやしれんで

妖怪

このよふに かまいつきものはけものも

かならずあるごさらにおもふな

いまゝでに 月日さんねんやまくご

つもりであるをみなはらすでな

このはらし ごふしてはらすごならば

月日の心みなしてみせる

けふまでは このよはじめてひいたてご

月日しんじつまだしろまいな

ごのよふな ござでも月日するごごや

いかなごごでもやまいではない

みのうちに どのよなごをしたごても

やまいではない月日ていりや

虎烈病

せかいには これらごゆふてあるけれど

月日さんねんしらすごごなり

せかいちう どの人でもおなじごご

いづむばかりの心なれごも

これからは 心しいかりいれかへて

よふきづくめの心なるよふ

造化ノ意

月日には にんげんはじめかけたのは

よふきゆさんがみたいゆへから

せかいには このしんじつをしらんから

みなごごまでもいづむばかりで

月日より よふきづくめごゆふのをな

これごめたならさんねんゑろなる

このはなし ごふぞしいかりきゝわけて

はやくしやんをしてくれるよふ

いまゝでは 月日ごゆうていたれご

もふけふからはなまへかへるで

けふまでは たいしや高山はびかりで

まゝにしてゐたここであれごも

これからは おやがかわりてまゝにする

これそむいたらすぐにかやすで

けふまでも おやのざねんごゆふものは

一寸のここではないごおもゑよ

このたびも まだせかいにはなにごごも

はびかるばかりなにもこららずに

以上月日ノ名ニ  
更ルニ親ノ名ヲ  
以テス

訓 にんげんも にごごもかわいであろふがな

それをおもふてしやんしてくれ

訓 にち／＼に おやのしやんごゆふものは

たすけるもよふばかりおもてる

それしらず みなせかいちうは一れつに

なんごあしきよふにおもふて

なにもかも おやのさんねんよくおもへ

ごごもばかりにいけんしられて

これからは ござんごころのいけんでも

おやがでゝあるうけるごごなし

このいけん どのよなものがはびかりて

ゆふごおもへばすぐにしりぞく

どのよふな しごごするのもしさきより

せへいいばいにこごわりておく

けふまでは gonna ことをもにち／＼に  
 あすからは gonna ことをばみたごとも  
 なををきいてもたのしみばかり  
 これまでは 高山からはなにもかも  
 づなさしづもうけたなれごも  
 このさきは どのよなことをゆわれても  
 おやのさしづやささらにうけんで  
 いまゝでは ひがらもちいさきたらんで  
 づななごともちいさしてゐた  
 もふけふは ひがちうぶんにつんである  
 づななごともそのまゝにする  
 これからは おやのおもふごごばかり  
 ひごごごゆるばこれちがわんで

せかいちう 一れつはみなごごまでも  
 づななごごをがあるやしれんで  
 どのよふな ごごがありてもしんじつの  
 心しだいにこわいごごなし  
 心さい すきやかすんだごごならば  
 づななごごでもたのしみばかり  
 このはなし うたごふ心あるならば  
 しよちしてゐよづななみちやら  
 せかいちう おやのたあにはみなごごも  
 かわいあまりでなにをゆふやら  
 このせかい 高山にてもたにぞごも  
 おやのためにはごごもばかりや  
 このたびは なんでもかでもしんじつの  
 おやの心をしらしたいから

これさいか たしかにしよちしたならば  
 つまでゐてもよふきづくめや  
 このみちは おやがたのみや一れつは  
 ごふぞしいかりしよちしてくれ  
 けふまでも ごのよなみちもだんぐご  
 ごほりぬけてはきたるなれごも  
 これからの みちはなんでもめづらしい  
 このみちごふりぬけたことなら  
 それからは おやの心がいきみで、  
 ごんなここでもはじめかけるで  
 これさいか はじめかけたることならば  
 ごんなものでもおやにもたれる  
 このみちを つけよふごてのしこしらゑ  
 ごんなものでもまだしろまいな

さあかゝれ もふこれからのみちすじは  
 ごんなものでもあぶなきはない  
 いま、では うちのものにもいろくくに  
 しんばいかけてきたるなれごも  
 あすからは おやが一はなでるほごに  
 ごんなここでもかやしゝてやる  
 さあけふは なにのはなしもだんぐご  
 こまかしくゆへもふせへつうや  
 なににても ゆわずにいてはわからんで  
 なにかいさいをみなゆてきかせ  
 このはなし なにのこごやらしろまいな  
 おやのはたらきみなゆふておけ  
 はたらきも なにのこごやらしろまいな  
 せかいの心みなあらわすで

これをばな あらわれだすゆふのもな

めゑくくのくちでみなゆいかける

ごのよふな ことでもわがみくちいより

ゆふことならばぜびはあろまい

これからは めゑくくになにもゆわいでも

おやがいりこみゆふてかゝるで

このさきは どんなものでもしんじつに

むねのそふじをみなしてかゝる

このそうじ ごふしてするごおもふかな

ごんないけんをするやしれんで

ごのよふな ことがありてもあんじなよ

なにかよろづはおやのいけんや

くちさきで なんぼしんじつゆふたごて

きゝわけがないおやのさんねん

それゆへに おやがたいないゝりこんで

ごんなことをばするやしれんで

ごのよふな せつないことがありてもな

やまいではないおやのさんねんや

このはなし ごこのことゝもゆわんでな

おやのためにはみなわが子やで

しんじつの おやのさんねんでたならば

このおさめかたたれもしろまい

これをばな まことしんじつあるならば

ごんなことでもゆふてきかする

ごのよふな ことをゆふやらしれんでな

これそむいたらすすぐにしりぞく

これまでは なにをしたごてごめられて

そむくばかりのことであるから



けふのひは どのよなことをしたごても  
 なにをゆふてもそむきなきよふ  
 このみちは くれぐれたのみおくほごに  
 おやがひきうけあんじないぞや  
 このことは なにのこごやごおもふなよ  
 つごめなりものはやくほしいで  
 もふけふは ごんなことをばしたごても  
 なにもあんじなおやのうけやい  
 いまゝでは 上にはなにもしらんから  
 さしごめばかりいけんしたれご  
 このたびは ごんなものでもかなわんで  
 ゆふ心ならおやがしりぞく  
 このこごを はやく心しいかりご  
 さだめをつけてはやくかゝれよ

なにもかも はやくつごめのしこしらへ  
 おやのうけやいこわみないぞや  
 これをばな 心さだめてしやんして  
 はやくにんぢゆのもよふいそぐで  
 はやくごご ころそろをてしいかりご  
 つごめするならせかいおさまる

御筆先十四號 (おはり)

御筆先 十五號

明治十三年正月(御教祖八十三歳の御時)より御書取

けふまでは なにのこゝでもちいきりご  
 ゆわずにゐたるこゝであれごも  
 もふけふは なんでもかでもゆふほごに  
 おやのさんねんこれをもてくれ  
 けふまでは なにをゆふてもにんげんの  
 心のよふにおもてゐたれご  
 さあいまは なにをゆふてもにんげんの  
 心あるごはさらにおもふな  
 ごのよふな こゝをゆふやらしれんでな  
 なにをゆふてもしよちしてくれ

このたびは ごんなためしをするやらな  
 これでしいかり心さだめよ  
 このはなし たれがこゝもゆわんでな  
 みなめへめへのこゝろさだめよ  
 いかほごに せつないこゝがありてもな  
 おやがふんばるしよちしてゐよ  
 これからは おやのゆふこゝしいかりご  
 しよちしてくれあんじないぞや  
 あすからは おやがはたらきするほごに  
 ごんなものでもそむきでけまい  
 いま、でも 四十三ねんいぜんから  
 おやがあらわれはじめかけたで  
 けふまでは たいてざねんもいくたびも  
 ちいごしてゐたこゝであれごも

さあけふは 月日はらがはじけたて  
 志かゑてゐたるここであれども  
 いまゝでは 村やおもてちいきりご  
 またおさまりてゐたるなれども  
 このたびは ごのよな心あるものも  
 みさだめつけてすぐにはたらく  
 こらほごに ざねんつもりてあるけれど  
 心しだいにみなたすけるで  
 いかほごに ざねんつもりてあるごとも  
 ふんばりきりてはたらきをする  
 けふの日は なにをゆふやらしれんでな  
 おやのざんねんみなあらわすで  
 いまゝでは 人の心のしんじつを  
 しりたるものはさらになれど

さあけふは ござんなものでもしんじつの  
 むねのうちをばたしかあらわす  
 これさいが みなあらわしたごならば  
 むねのそふじがひこりできるで  
 けふからは ござんはなしをしかけても  
 なにをゆふてもしよちしてくれ  
 だんぐご なにをゆふやらしれん  
 ござんなごごでもおもわくをする  
 いまゝでは 四十三ねんいぜんから  
 あしをなやめたこれがしんばい  
 このたびは なんでもかでもこれをばな  
 もごのごふりにしてかやすでな  
 このはなし なにを月日がゆふたごて  
 ござんなごごでもそむきなきよふ

これからの おやのたのみはこればかり  
 ほかなることにはなにもゆわんで  
 このことを なにをたのむとおもふかな  
 つごめ一ちよのことはかりやで  
 このつごめ これがこのよのはじまりや  
 これさいかのたことであるなら  
 さあけふは をやのゆふことなにごとも  
 そばの心にそむきなきよふ  
 そばなるの こゝろちがゑばせひがない  
 そこでくゞくゞゆふておくぞや  
 けふの日は なによのこともせかいには  
 しりたるひとはさらになけれど  
 おやのめに しいかりみへてあるほごに  
 ごんなことやらたれもしろまい

このよふを はじめてからにいまゝでは  
 たれでもしらぬことばかりやで  
 そのことを おしへたいからだんぐご  
 そこでこのよなことするのや  
 なにもかも どのよなこともゆておいて  
 それからおやがはたらきをする  
 はたらきも ごんなことやらしろまいな  
 せかいぢうはおやのからだや  
 いまゝでの をやのざんねんしらすたさ  
 そこてこのたびみなしてみせる  
 どのよふな ことをするやらしれんでな  
 みな一れつはしよちしてゐよ  
 このたびの ざねんくごきのこのはなし  
 みないちれつはなんごおもてる

このもごは 四十三ねんいぜんから  
 煮らいためしがかけてあるぞや  
 これさいか しいかりしよちしたならば  
 ござなことをがかなわんでなし  
 せかいちう みな一れつをたすけたさ  
 そこのためしが煮らいことやで  
 けふまでは ごのよなみちもごふりぬけ  
 じいごしてゐたことであれごも  
 もふけふは なんでもかでもしんじつを  
 してかゝるでなしよちしてゐよ  
 いまゝでご みちがころりごかわるでな  
 みな一れつは心さだめよ  
 訓 このみちは うちもせかいもへだてない  
 せかいじうのむねのそふじや

このよふを はじめてからにけふまでは  
 ほんしんじつをゆふたことなし  
 けふの日は ほんしんじつをゆいかける  
 ごふぞしいかりしよちしてくれ  
 このはなし 四十三ねんいぜんから  
 煮らいためしがこれが一ちよ  
 このためし なにのこごやごもおもふかな  
 つごめ一ちよせくもよふやで  
 このつごめ ごふゆふことにおもふかな  
 なりものいれて人ちうのもよふ  
 このつごめ ござなものでもしやんせよ  
 これごめたならわがみごまるで  
 訓 このよふを はじめかけたもおなじこと  
 ないにんげんをはじめかけたで

これさいか はじめかけたるこそならば  
 このことは しいかりしよちせんならん  
 いまゝでは 高山やとてけんくご  
 これからは いかほごたかい山でもな  
 このさきは たにぞこにてはだんくご  
 だんくご よふぼくにてはこのよふを  
 このよふを はじめたおやがみな入こんで  
 ほんなことをばするやしれんで

このよふな ことをしたとてあんじなよ  
 このことを はやく心をしいかりご  
 けふまでは ほんなみちやられたれにても  
 もふけふは しの心をだんくご  
 をやのめに かのふたものはにちくご  
 おやのめに ざねんのものはなんごきに  
 このはなし ざこのことゝもゆわんでな  
 せかいちうはみなわがこやで

訓 一れつの ござもはかわいばかりなり  
ここにへだてはさらになれれご

訓 しかさきけ 心がゑばぜひがない  
そこでだんぐりていりするのや

このことは 高山にてもたにぞこも  
ゆだんなきよふ心さだめよ

さあたのむ なにをたのむとおもふかな  
はやくなりものよせてけいこふ

これまでは ござなこごでもちいくりご  
まだおさまりてゐたるなれごも

もふけふは なんでもかでもはやくご  
つごめせゑねばならんこごやで

いまゝでは ござなこごでもだんぐりご  
いろくたのみかけてあれごも

なにごごを たのんだごてもたれにても  
きゝわけがないおやのざんねん

このたびの ざねんくごきのこのはなし  
ごうぞしいかりきゝわけてくれ

けふの日は おやがなにごごゆふたごて  
ござなこごでもそむきなきよふ

いまゝでは ござなはなしをしたごても  
なにをゆふてもにをいばかりや

けふの日の はなしごごゆふはせへつうや  
もふそのまゝにすぐにみへるで

このはなし 四十三ねんいぜんから  
むねのざんねんいまはらすでな

それしらず うちなるものはなにもかも  
せかいなみなるよふにおもふて

眼離

このみちは 四十三ねんいぜんから

まここなんじうなみちをさふりた

そのここを いまゝでたれもしらいでも

このたびこれをみなはらすでな

このはらし ごふしてはらすここならば

つごめ一じよでみなあらわすで

このつごめ おやがなにここゆふたさて

ごんなここでもそむきなきよふ

こればかり くれぐれたのみおくほごに

あごでこふくわいなきよふにやで

このたびの つごめ一ちよごめるなら

みよふだいなりさすぐごしりぞく

このはなし なんごおもふてそばなもの

もふひごいきもまちてゐられん

はやくご なりものなりさだしかけよ

つごめばかりをせへてゐるから

御筆先十五號 (おはり)



御筆先 十六號

明治十四年四月(御教祖八十四歳の御時)より御書取

いま、では このよはじめたにんげんの  
もごなることをたれもしろまい

このたびは このもごなるをしいかりご  
ごふぞせかいゑみなおしゑたい

神樂

このもごは かぐらりよにんつごめはな  
これはしんじつこのよはじまり

このたびの かぐらごゆふはにんげんを  
はじめかけたるおやであるぞや

このもごを しりたるものはないのでな  
このしんじつをみなおしへるで

いま、でも にちくくごきだんぐご  
ゆふてきかしたごはあれごも

もふけふは いかほご月日ゆふたごて  
一れつ心わかりないので

それゆへに もふせへつうがきたるから  
せびなくいまはかやしするぞや

このかやし 一寸のごご、はおもふなよ  
あ、ちこ、ちにお、くみゑるで

このよふの にんげんはじめもごなるを  
ごこの人でもまだしろまいな

このたびは このしんじつをせかへぢうへ  
ごふぞしいかりみなおしゑたい

しかごきけ このもごなるごゆふのはな  
くにごこたちごおもたりさまや

創世

このおかた ごろみづなかをみすまして  
 うをさみいごをそばいひきよせ  
 このたびの さねんといふはしんからや  
 これをはらするもよふないかよ  
 このごを 神がしいかりひきうける  
 さんなかやしもするごおもへよ  
 このかやし みへたるならばごまでも  
 むねのそふじがひさりでけるで  
 いまゝでは ごのよなごもみゆるして  
 ちいごしてゐたごであれごも  
 けふの日は もふひがつんであるからな  
 さんなごでもすぐにかやすで  
 このごころ さめる心でくるならば  
 そのまゝごこい月日でるやら

でるのものな さんなごやらしろまいな  
 月日むかいにでるでしよちせ  
 けふの日は もふちうぶんにつんである  
 ごのよなみちがあるやしれんで  
 せかいちう みな一れつはしかさせよ  
 なんごき月日つれにでるやら  
 けふの日は めづらしごをゆいかける  
 なにをゆふごもたれもしろまい  
 せかいには みなごごまでもをなじご  
 ごごもかたづけこしらゑをする  
 いかほごに こしらへしたごゆふたごて  
 そのさきなるはたれもしろまい  
 月日には さんなおもわくあるやらな  
 このみちすじはしりたものなし

このさきは どのよなゆめをみるやらな  
もんくかわりて心いさむで

どのよふな めづらしゆめをみるやらな  
これをあいづにつごめにかゝれ

けふの日は どのよなこどもきいて  
なんごきもんくかわるこごやら

このよふな ころがありてもうらみなよ  
みなめへくにするこごやでな

訓 月日には みな一れつはわが子なり  
かわいい、ばいをもていれごも

訓 めへくゝに するこごばかりぜひはない  
そこでちいくりみてゐるのやで

けふの日は なんにもしらずにいるけれど  
あすにちをみよゑらいおゝくわん

このみちが みるたるならばこのよふな  
ものでもかなふものはあろまい

月日には ござんなおもわくあるやらな  
この心をばたれもしろまい

これをばな みへかけたならごこまでも  
むねのうちをばひごりすみきる

これからは このよはじめてなにもかも  
ないこごばかりゆいかけるなり

いま、では 人の心のしんじつを  
たれかしりたるものはなけれど

このたびは 神がおもていでゝるから  
ござんこごでもみなおしへるで

諷 このはなし ござんこごもゆわんでな  
みのうちさわりこれでしらする

こんなここ なんてゆふやおもふなよ  
 かわいあまりでゆふここやでな  
 どのよふな ここでもわがみするここに  
 神のしらんといふことはない  
 それゆへに なにもよろづをこわりて  
 そのゆゑかゝるしごとなるぞや  
 いまゝでは なによのこともちいきりこ  
 しかゑていたるここであれども  
 しかごきけ いまゝでなるのはなしはな  
 なにをゆふてもきいたばかりや  
 けふの日は みちがいそいでゐるからな  
 ざんなここでもはやくみへるで  
 それゆへに でかけてからはごむならん  
 そこで一れつしやんするよふ

いまゝでも 神のくごきはだんくご  
 いろくごいてきたるなれども  
 いかほごに くごいたごてもたれにても  
 きゝわけがないおやのざんねん  
 こゝまでも よふいなくごきやないほごに  
 このたびこそはしやんするよふ  
 このはなし なんごおもふてきいてゐる  
 つもりかさなりゆへのここやで  
 けふの日の 神のざんねんりいぶくは  
 よいなるここでないごおもゑよ  
 月日より ないにんげんやないせかい  
 はじめかけたるおやであるぞや  
 そのごころ なにもしらざる子ごもにな  
 たいこごめられこのざねんみよ

此村集會シテ大  
 鼓ヲ止メシテ云フ

このたびは このかやしをばするほごに  
 みなごこまでもしよちしてゐよ  
 けふまでは なにもしらずにゐたけれご  
 さあみえかけたゑらいたのしみ  
 訓 このみちは ごんなこごやごおもふかな  
 せかい一れつむねのそふじや  
 このこごは なんのこごやごおもてゐる  
 神のざんねんはらすこごやで  
 このさきは ごこの人ごもゆわんでな  
 むねのうちをばみなみているで  
 けふからは 月日でかけるはたらきは  
 ごんなこごをばするやしれんで  
 いまからの 月日はたらきするのほな  
 ごこでするごもたれもしろまい

高山も たにぞこまでもせかいちう

一れつをみなあゝちこゝちご

月日より せかいちうをばはたらけは

このおさめかたゝれもしろまい

それゆへに このしづめかた一寸しらず

一れつはやくしやんするよふ

つごめでも ほかのこごゝはおもふなよ

たすけたいのが一ちよばかりで

それしらず みなたれにてもだんゝご

なんごあしきのよふにおもふて

にんげんは あざないものであるからな

なにをゆふごもしんをしらずに

けふまでは ごんなこごでもゆわなんだ

ちいごしていたこのざねんみよ

音二郡ノ丹波市  
松田氏ノ隱居  
松田氏ノ三反  
金一持參シテ  
縁付カセンテ  
ラレシムテ教  
祖之ヲ止ム音  
耶氏之ヲ用テ  
ザルニ付年チ  
秀枝氏御歸後  
通松且眞助氏  
カノ參拜多カ  
カノ教祖松枝  
中田眞介山本  
信六人ヲ招喚  
スル止メザル  
察シ爾後コソ  
ラハ人宛ニ一  
十五錢ノ料ニ  
處セラレタリ  
後又神佛混交  
ノ罰ニヨリ南  
山本利八、南  
中田、辻、南  
ノ利八、南

これからは 神のおもわくするからは  
 いまゝでは なにもゆふたりおもふたり  
 このさきは 神がしはいをするからは  
 にんげんの めゑにはなにもみへねども  
 こしらゑを やるのはしばしまちてくれ  
 いまゝでは ごんなここでもゆわなんだ  
 もふけふは なんでもかでもみへるでな  
 神のめゑにはみなみへてある  
 ごろみづなかいはめるごこくや  
 けふはなんでもゆわねばならん  
 こくげんきたら月日つれゆく

清造、乙木、山中  
 以留ニ處セラレ  
 拘留ニ處セラレ  
 年々秋ノ頃十五  
 此七人ノ監獄ノ  
 門ヲ出テ本席  
 入獄セラル本席  
 十日ノ拘留ニシ  
 十人ノ出獄ニシ  
 人ノ出獄ニシ  
 松枝氏ノ出獄ニシ

けふの日は もふちうぶんにつんできた  
 つれいくも 一寸のここではないほごに  
 いかほごの たかいごころごゆふたさて  
 さあしやん これから心いれかへて  
 しやんさだめんごこにいかんで

御筆先十六號 (おはり)

御筆先 十七號

明治十四年六月(御教祖八十四歳の御時)より御書取

いま、では なんのみちやらしれなんだ  
 このみちは ごふゆふここにおもふかな  
 このだいを ごふゆふここにおもてゐる  
 これをばな なんごおもふてみななもの  
 このたびは このもごなるをしんじつに  
 けふからさきはみちがわかるで  
 かんろふだいのいちぢよのここ  
 これはほんの一のたからや  
 このもごなるをたれもしろまい  
 ごふぞせかいへみなおしへたい

甘露壺ノ地ヲ云フ

このもごは いざなぎいざなみご

靈地

そのここで

せかいぢうのにんげんは

みのうちよりのほんまんなかや

そのちばは

せかい一れつごこまでも

みなそのちばではじめかけたで

靈地

にんげんを

はじめかけたるしよふこに

かんろふだいをすゑておくぞや

このだいが

みなそろいさいしたならば

ごんなここをがかなわんでなし

それまでに

せかいぢうをごこまでも

むねのそふじをせねばならんで

このそふじ

ごこにへだてはないほごに

月日みわけているごおもへよ

月日には ござんなごころにゐるものも

心しだいにみなうけざるで

いまゝでは ござんな心でゐたるごも

いちやのまにも心いれかへ

しんじつに 心すきやかいれかへば

それも月日がすぐにうけざる

月日には せかいちうはみなわが子

かわいゝばいこれが一ちよ

いまゝでは ござんなものでもむねのうち

しりたるものはさらにあるまい

このたびは ござんなごころにいるものも

むねのうちをばみなゆてきかす

訓 これまでは かべひごよにてへだてたら

なにをゆふても一寸もしろまい

けふからは よこめふるまもないほごに

ゆめみたよふになにをするやら

いまゝでの つきひざねんごゆふものは

なかく一寸のこゝでないぞや

けふまでは なにもしらずにゐたけれど

さあみへてきたゑらいほんみち

このみちを はやくみごふてせきこんだ

さあこれからはよふきづくめや

このはなし ざふゆふごにおもふかな

ふでのさきがなみへてきたなら

いまゝでは ざのよなごもきいていた

このたびこそはざねんはらすで

このはらし ざふゆふごにおもふかな

なんごきごこでしりぞくやらな



これまでのの ながいごふちうこのざねん  
 一寸のここではないごおもゑよ  
 これからは このかやしをばするほごに  
 みな一れつはしよちしてゐよ  
 せかいちう ごこのものはゆわんでな  
 月日しいかりみなみているで  
 ごのよふな ことをゆふてもおもふても  
 月日しらんごゆふごごはない  
 このさきは ごのよなことをするにもな  
 月日さきゑごごわりておく  
 これからは 月日ざんねんでたならば  
 ごのよなごごがあるやしれんで  
 けふの日は ごのよなごごもつんできた  
 神のざんねんはらすみてゐよ

明治十五年春  
 製ノ甘露糖ヲ据  
 エシテ五月丹波  
 市警察署取拂  
 市へ辻氏持参ス

いまゝでは このよはじめたにんげんの  
 もごなるちばはたれもしらんで  
 このたびは このしんじつをせかいちうへ  
 ごふぞしいかりおしへたいから  
 それゆへに かんろふだいをはじめたは  
 ほんもごなるのごころなるのや  
 こんなごご はじめかけるごゆふのものな  
 せかいちうをたすけたいから  
 それをばな なにもしらざる子ごもにな  
 ごりはらわれたこのざんねんはな  
 しかごきけ このさきなるはごのよふな  
 かやしあるやらこれしれんでな  
 つきひより このざんねんごゆふのはな  
 なかく一寸のここでないぞや

かやしでも 一寸のここごはおもふなよ

ごんなここをば月日するやら

このはなし なんごおもふぞみなもの

神のざんねんゑらいここやで

いまゝでは ごのよなみちもだんくご

ごふりぬけてはきたるなれごも

もちいこの こくげんきたらんそれゆへに

ちいごしてゐたここであれごも

けふの日は もふちうぶんにつんできた

こくげんきたらすくにかやすで

この日はな いつのここやごおもてゐる

二十六日がきたるここなら

それから なんでもかでもしんじつの

心それくみならわすで

こんなここ なんでゆふやごおもうなよ

かわいあまりでゆふここやでな

月日には せかいちうのここもわな

かわいばかりをおもてゐるから

それゆへに せかいちうをどこまでも

むねのそふじをしたいゆへから

このそふじ ごふゆふここにおもてゐる

たすけばかりをおもてゐるから

たすけでも あしきなをするまでやない

めづらしたすけおもてゐるから

不老不死

このたすけ ごふゆふここにおもふかな

やまずしなすによわりなきよふ

こんなここ いまゝでどこにないここや

このしよふこふをしらしたさやで

これまでは ごとたづねてもないことや  
 このたび神がはじめたさやで  
 けふまでは ござんみちやらしれなんだ  
 これからさきはみちをしらす  
 このみちは ぞふゆふことにおもふかな  
 月日さんねんいちじよふのこと  
 このざねん なにのこことやごおもふかな  
 かんろふだいが一のざんねん  
 このざねん 一寸のこことではないほごに  
 ござんかやしを月日するやら  
 どのよふな ころがありてもうらみなよ  
 みなめゑくくにしておいたのや  
 このさきは せかへちうはごこまでも  
 高山にてもたにぞこまでも

これからは せかい一れつだんくご  
 むねのそふじをするごおもへよ  
 このそふじ なんごおもふぞみなもの  
 神の心をたれもしろまい  
 月日には ござんざねんはあるごとも  
 いまゝでちいごみゆるしてゐた  
 さあけふは 日もちうぶんにつんできた  
 なんでもかやしせずにおられん  
 このかやし なにのこことやごおもている  
 神のざんねんばかりなるぞや  
 このざねん 一寸のこことはおもふなよ  
 つもりかさなりゆへのこことやで  
 月日には せかいちうはみなわが子  
 かわいいゝばいおもていれごも

それしらず みな一れつはめへくくに  
 ほこりばかりをしやんしている  
 この心 神のざんねんおもてくれ  
 ごふむなんともゆふにゆわれん  
 いまゝでの よふなるここはゆわんでな  
 これからさきはささりばかりや  
 このさきは なにをゆふやらしれんでな  
 ごふぞしいかりしやんしてくれ  
 ささくく たをさくくびよふさまく  
 このはなし あいづたてやいでたならば  
 なにゝついてもみなこのごふり  
 これをばな 一れつ心しやんたのむで

御筆先十七號 (おはり)

ささくくハ三昧  
 田前川家たなと  
 ハ田村音次郎び  
 よさまハ兵堂寺  
 小東家

御筆先 追歌

明治十八年酉五月(御教祖八十八歳のお時)御書取

けふまでは なんのみちでもしれなんだ  
 これからさきわみちをしらす  
 このみちは かみのおもわくばかりやで  
 なにをゆふごもちよこにしれんで  
 なにごさを ゆうごもこれをけさんよふ  
 これごめたならいきがさまるで  
 これからは かみがしいかりいで  
 なにをゆふごもするごもしれんで  
 これでここわりゆふておきます

御筆先追歌 (おわり)

317  
683

大正十四年十一月十日第一版  
昭和二年一月二十日第二版  
昭和三年四月二十日第三版

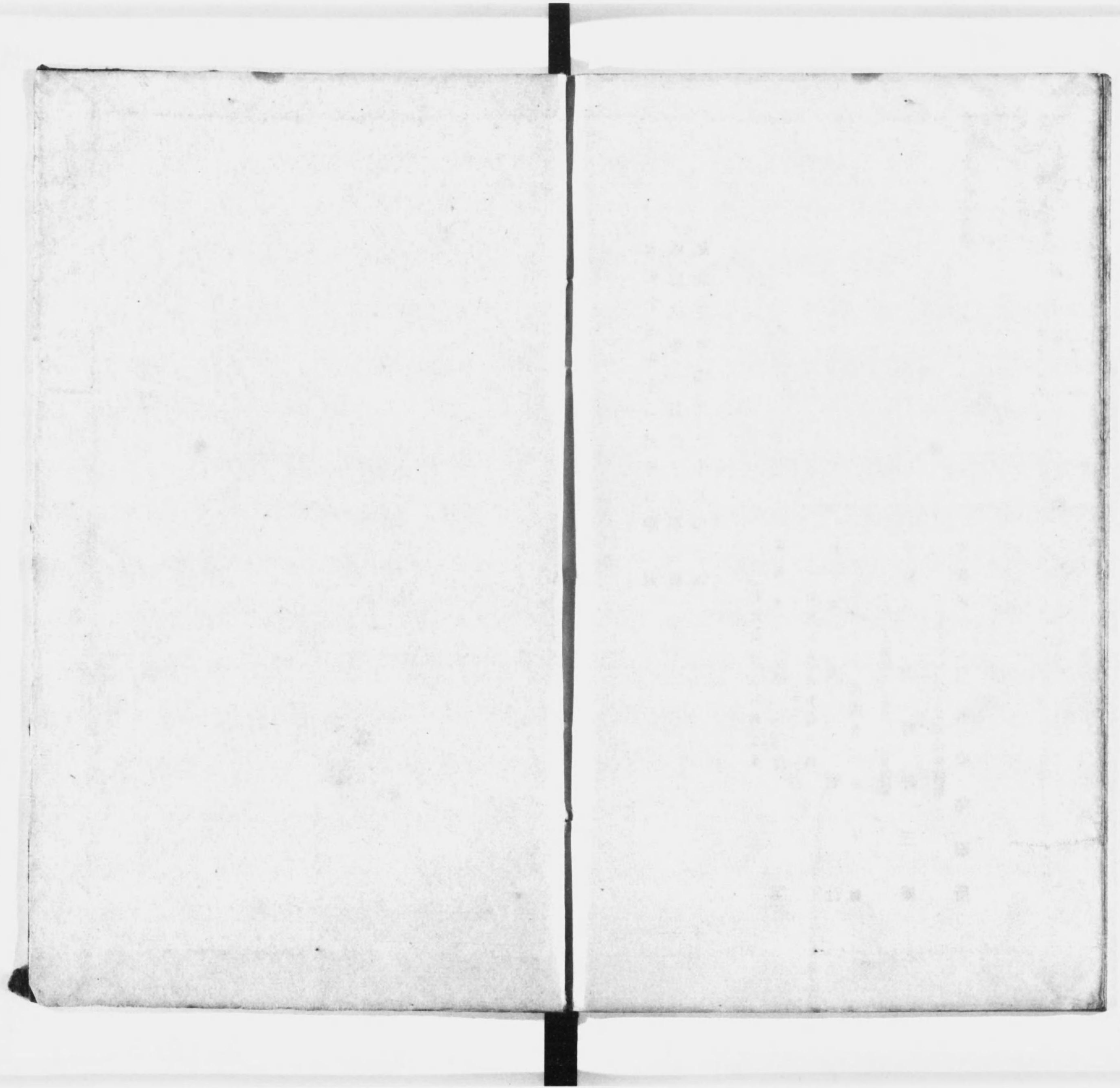
編輯者 奈良縣丹波市町三島 安江

發行者 天祐社  
代表者 安江

印刷人 淺野好三郎  
神戸市布引町二丁目二十三番屋敷

印刷所 白馬堂印刷所  
神戸市布引町二丁目二十三番屋敷





終

